

動的家族画 (KFD) にみられる親子関係についての基礎的研究

— 子どもと母親の描画を通して —

羽 根 由紀奈

I. 問題と目的

動的家族画 (KFD) は、臨床心理検査として、人格形成の基礎的な場としての家庭を被験者がどのように把握しているかをみるための、描画を使った投影法である (加藤, 1985)。そこには描画者が理解している家族関係が描写されるのと同時に、個々の家族成員に対する対人認知のパターンも示される。例えば、母親を描く場合でも、従来の静止画像的な家族画であれば、「母親は女性だから女性らしく」描かれるのにとどまっていたのが、「母親は女性であると同時に我が家ではもっとも頼もしい人である」といった描画者の認知が反映されることになる (日比, 1989)。描画に動きを加えることにより、家庭内の愛情、競争、葛藤、不安、拒絶、敵意などといった様々な指標が、行為、様式、象徴、また自己像の位置や家族成員との距離といったことに表現され、描画からは非常に有益な情報が得られることになるのである。したがって、描画者の認知している家族間の相互作用や自分を含めた家族成員に対する認知に関する情報を得ることができ、描画者の主観的、情緒的な家族理解をみるのに非常に適しているといわれる。

KFDを確立したBurnsとKaufman (1971)の研究以後、多くの実証的な研究がなされてきたが、いずれの研究もその目的として直接に家族関係、あるいは親子関係そのものをとりあげてはおらず、またすべて子どもの側からみた家族像、家族の中の自己像を扱っており、親など子ども以外の成員からみた家族像についてはふれられてこなかった。しかし、家族成員のもつ家族関係の認知は、家族の相互作用の中でつくりられ、成員各々のもつ家族像は相互に影響し合っていると考えられる。したがって、子どもと親の両者から家族像を捉える必要があると考えられた。

本研究は、子どものKFDにみられるいくつかの特徴的な表現について親子関係の視点からそれぞれの意味を考察した。また、子どもと母親のKFDを比較し、子どものもつ家族イメージと母親のもつ家族イメージとの間の一致あるいは相違に注目することで、子どものKFDだけではみられなかった複数の観点からの家庭での親子関係を検討を行なった。

II. 方法

顕著な適応上の問題を有していない、小学校1年生から中学校3年生までの男女とその母親を対象とした。得られた描画のうち少なくとも本人と父親、母親 (母親の場合は本人と子ども、夫) が描かれているものを用いた。描画は子どもKFDが93枚、母親のKFDが66枚であった。子どもから得られた描画のうち、以下にあげる5つ点において、特にその傾向が顕著なものを数例あげ、その母親のKFDと合わせて考察した。

- ① - a 自己を最大人物像にしたもの b 自己を最小人物像にしたもの
- ② - a 母親を最大人物像にしたもの b 母親を最小人物像にしたもの
- ③ - a 父親を最大人物像にしたもの b 父親を最小人物像にしたもの
- ④ - a 自己-母親像間の距離が遠いもの b 自己-母親像間の距離が近いもの
- ⑤ - a 自己-父親像間の距離が遠いもの b 自己-父親像間の距離が近いもの

III. 結果と考察

① - a : 自己を最大人物像にした子どものKFDには2つのタイプがあった。ひとつは安定した親子関係の中で、安心して自分らしさを出し、のびのびとした自己像を描くタイプで、母子双方のKFDに、家族間の情緒的交流がみられる。もうひとつは、両親との交流を求めながらもそれが得られないため、その欲求を自己像を大きく描くことによって表現しているタイプで、その母親のKFDでは交流の障壁は描かれず、そこに母子の認識の相違がみられた。

① - b : 自己を最小人物像に描く場合、父親>母親>自己像 (あるいは母親>父親>自己像) といった大きさの順位が、安定した家庭内の序列として母子双方に受け入れられ、また家族間の情緒的交流が母子双方の描画にみられた。また一方で、序列の安定性とはいえず、家庭内における自己の位置付けに安心感をもてずに萎縮した自己像が描かれる場合もあった。これらには序列に関する母子の認識の相違、家族間の交流の障壁があった。

② - a : 母親像を最大人物像に描いたものには、大きすぎる母親像を遠ざけて自己を守ろうとしているもの、あ

るいは求めていても十分には得られない母親の自分への関心の欲求のから母親像を大きく描いたといえるものがあった。前者においては、母親との情緒的交流は阻止されて描かれ、後者では交流は妨げられていないものの、不安感を示すサインがみられた。母親のKFDは、子どものものとは対称的に交流に何ら問題を感じていないものと、母親自身何らかの交流の障壁となるものの存在を描いているものがあった。しかし、家庭内での序列が母子共に自然な形で受け入れられていたり、家族間での情緒的交流がスムーズに行なわれていると思われるものについては、子どもの描画には安定した家庭のあたたかさ表れていた。

②-b：母親像を最小に描く時、多くの場合、母親の行為は家事をしているところといった社会的な役割を担わされて描かれた。一方でそれは、家庭内における序列において母親が低い位置付けになり、そのことが子どもからみた家族像においては、家族の情緒的交流には入っていない母親像につながる可能性があることがわかった。また、母親は家族間の相互作用、交流はあると認識しており、子どもが感じている母子間の障壁は感じておらず、そこに母子の認識のずれがあった。

③-a：父親像が最大に描かれる多くの場合、父親の家庭内の序列における高い位置付けを意味し、頼もしい存在として描かれた。また、そういった子どもの認識は、母親においても共有され、情緒的交流の通った安定した家族像が母子双方のKFDに表れた。

③-b：父親像を最小に描く時、そこには頼もしい存在である父親の姿ではなく、弱々しい姿で描かれる。また、そういった場合、家族相互の交流は途絶えた様式がとられ、父親に対しての怒りや拒否感が表された。しかし、家族の情緒的交流のある様式がとられることもあり、そういった時には、母親の描画においても子どもの描画と同様の傾向がみられた。父親像の小ささが極端な形でなく、また家族像に関する母子の認識の一致が、子どもの安定した描画につながっていると考えられた。

④-a：自己-母親像間の距離が遠い時、それが母親（あるいは両親）との安心した関係に基づく距離感とい

える場合には、家族間の情緒的交流が母子双方の描画に表れた。一方で、交流が途絶えた形で表される時は、子どもは描画に愛情やあたたかさへの欲求を象徴的に描き、また不安感のサインを示した。母親は、子どもとの距離は感じているものの、交流の障壁については感じていなかった。

④-b：自己-母親像間が近い時、多くの場合は描画者である子どもよりも年令の低いきょうだいがあり、そのきょうだいとの関係の中での母親との距離のもち方が問題となっていることが示唆された。しかし、そのことが家族間、母子間の感情交流の妨げとはならないことがわかった。

⑤-a：自己-父親間の距離が遠い時、子どものKFDは3つのタイプに分類することができた。タイプIは、父親との心理的距離はあるものの感情の交流は存在し、また最大人物像としては父親を描いているもので、母親のKFDにおいても子どものものと同様の傾向がみられた。タイプIIは、父親の存在が希薄なもので、交流の障壁は描かれられないものの、父親に対する関心の度合い、交流への欲求が低いと思われるもの。母親は子ども-夫間の距離を子どもほど感じていなかった。タイプIIIは、父親に対して敵意や拒否感をもっていると思われるもので、家族間の交流は途絶えた形であった。

⑤-b：自己-父親間の距離が近くなる時は、概ね肯定的な意味をもった安定した家庭であることが考えられた。家族間の交流は行なわれ、母親のKFDも同様の傾向をもっていた。

以上、子どものKFDにおける特徴には、それぞれに考えられる親子関係の姿が表れているといえる。しかし、同じ特徴をもった描画であっても、家族間の円滑な情緒的交流が存在するかどうか、また交流や描画の特徴についてある程度母子の認識が一致しているかどうかで、描画の印象がポジティブにもネガティブにもなった。特に、情緒的交流については、どの特徴をもつ描画であっても、安定した親子関係には必要不可欠なものであることがわかった。